

コロナ禍での日本の劇場・オペラ団体 ～日本オペラ協会に聞く～

郡 愛子 (日本オペラ協会総監督)

石田麻子 (聞き手／『日本のオペラ年鑑』編集委員長)

2021年9月7日実施

主催公演の状況

石田：日本オペラ協会は2020年の主催公演は中止・延期がないのですね。

郡：はい、幸いなことになかったんです。寺嶋民哉作曲の《紅天女》が2020年の1月11日から1月15日（オーチャードホール）までの5回公演で、コロナ前だったんです。コロナ禍が深刻になって、第1回目の緊急事態宣言が出たのが4～5月にかけてで、《紅天女》が終わって翌月の2月、3月ぐらいから中止・延期という話になってきました。

石田：そのあたりからわざわざ始めましたよね。1月以降の公演で具体的に中止になったものはありますか？

郡：コンサートが1つあります。5月に予定していた、日本オペラ協会日本歌曲連続演奏会です。中止ではなく延期という形にして、今年、渋谷区立文化総合センター大和田の伝承ホールでやりました。それ以外は基本的には大きなことはなかったです。

石田：その時期は緊急事態宣言中ですから、有無を言わず中止ということですか？

郡：コンサートの中止については、有無を言わずというか、自主的にですね。

石田：それは郡さんがお決めになったのですか？

郡：そうですね。コロナ対策のことは、新たに出来た条例やガイドラインなどを事務局がものすごく勉強してくれまして。それから団体会員会などでも、「しっかりと感染対策をし

ているのか？」と厳しい質問がありました。ですから、みんなでルールをいろいろ作り、稽古ももちろんマスクとフェイスシールドを全員が着けて、譜面台や椅子を全部アルコールで拭いたり、というような基本的なことはずっとやってきていました。

ただ、やはり日本オペラ協会の歌手からも、表立ってはあまり出なかったものの、フェイスシールドをして歌うということに対する不満はずっとあったようです。

石田：2021年2月公演の中村透作曲《キジムナー時を翔ける》の稽古の時もそうした対応でしたか？

郡：マスクとフェイスシールドを両方付けて2重にして、本番のときはフェイスシールドだけつけました。あの頃、本番をフェイスシールドでやるということに対して、いろいろな意見がありましたよね。新国立劇場とか東京二期会は、フェイスシールドを着けずに公演されていたので、「なぜ日本オペラ振興会だけフェイスシールドをしているのか？」とずいぶん言われましたが、日本オペラ振興会としては万全を期したいということでした。おかげさまで《キジムナー時を翔ける》もコロナ感染者は1人も出ませんでした。石田：コロナ対応についてもう少し具体的に教えてください。

郡：《キジムナー時を翔ける》は、ザ・スタッフの齋藤美穂さんという、ベテランの舞台監督が担当してくれて、齋藤さんからしよっ

ちゅう対策を考えたメールが来ました。すごく心配して、会場の新宿文化センターにもいろいろ問い合わせをして連携してくれて。日本オペラ振興会自身もものすごく大変な思いだったけれども、スタッフや会場も含めみんなが対策に気を遣って創りあげました。

なんといっても藤原歌劇団が、2020年8月に折江忠道総監督の下《カルメン》を始めてくださったのが大きかったですね。それで、こちら安心して公演をやれたというのがあります。

石田：藤原歌劇団が先陣を切りましたよね。

郡：あれがなかったらうちは動けなかった。やはり私どもは藤原歌劇団に沿って動いていますから。

所属アーティストの状況

石田：コロナ禍で2020年の4月から一切止まってしまった時に、所属のアーティストたちの活動状況はどうなったのですか。

郡：2月末あるいは3月頭ぐらいからは、みなさん完全に仕事はなくなりました。

石田：それが徐々に回復してきたのはいつ頃ですか。

郡：藤原歌劇団が8月に《カルメン》の公演を始めた後ぐらいから徐々にで、恐らく9月ぐらいから、コンサートのようなものが再開し始めたかなと認識しています。

日本オペラ振興会に所属する歌手さんのなかには、仕事が全くなくなったので、会費が払えないから辞めたいという方もいらっしゃるようです。会費の支払いを先延ばしにしてくれないかという声もありました。それでいろいろ考えて、日本オペラ振興会も大変な中からかなりお金を出して、会費を半額免除にしました。そのために会費の収入が減ってしまった形です。

石田：今、日本オペラ協会はだいたい何人ぐらい団員さんがいらっしゃるのでしょうか。

郡：日本オペラ協会自体はものすごく少なく、100人とかそんなものです。それで藤原歌劇団と両方に入るように促すことを3年前から始めていて、今、両方に入っている方が300人ぐらいでしょうか。ですから日本オペラ協会単体会員とあわせて300～400人かな。藤原歌劇団団員は今、全部で1,100人いますので、1,100人全員がそうになってほしいなと思っています。

補助金の利用状況など

石田：公演に関わるいろいろな補助金、持続化給付金などは利用されたのでしょうか。

郡：はい。申請させていただいて、通っているものもあります。

石田：コロナで特別に実施された公演というのはあるわけですか。

郡：あります。東京都の補助金の「アートにエールを！」で、2020年の9月26日にコンサートを1つ、日本オペラ協会としてやらせていただきました。「心の絆～この歌に支えられて 日本オペラ～日本歌曲～Jポップに込められた“ニッポンのこころ”」というタイトルで、渋谷区文化総合センターのさくらホールを会場にしました。お客さまは100名限定だったのですが、チケットもすぐ売り切れて、やっぱりお客さまは待っていたんだと感じられました。日本の歌ということで、歌曲だけでなくポピュラーからなんでもというプログラムで、このシリーズはやっぱり人気があるんですよ。これは歌手の側にとっても歌う機会であり、少し安いけれどもギャラがちゃんと出たということで、「アートにエールを！」のおかげでできた企画です。

石田：やはり歌うことからしばらく遠ざかってしまっていたから、みなさん何となく恐る恐るみたいな感じがあったのではないのでしょうか。

郡：それはありますよね。もう歌手さんは

本当に待つて待つて、歌いたくてというので。普段でさえ100%の力を出そうとするのが、200%を出そうという感じで力が入っていました。

それから11月29日には藤原歌劇団・日本オペラ協会ガラコンサートというのをいたしました。これはJ-LODliveの補助金をいただきました。東京文化会館の大ホールを会場にして開催できました。こうした苦しい状況の中で、コロナ禍で補助金をいただけのでしたらやりましょうということで、日本オペラ協会にとっては初めてとなる藤原歌劇団との合同コンサートという企画が実現したんです。そういう意味では、コロナ禍ではありませんでしたが、私たち日本オペラ協会にとっても力になりました。藤原歌劇団とは、「川崎・しんゆり芸術祭アルテリッカしんゆり」でオペラを一緒に上演することは続くのですが、コロナ禍でもそういうやりがいのあることができたという事実もあります。

石田：藤原歌劇団との合同コンサートが初めてというのは意外ですね。

郡：やはりなかなか合同というのは難しい。それで私どもでも衣裳を着けたり、尺八を入れたりして、少し日本オペラらしい雰囲気を出しました。なかなか思うようにいかないこともありました。思いがけずそういうところでアピールができたというのもあります。

観客の状況

石田：公演に際してお客さまは戻ってきていますか。

郡：2020年9月の「アートにエールを！」のコンサートが、先ほど言ったように、100席ですが売り切れ、11月の合同コンサートは売り切れとまではいきませんでした。みんなで頑張りまして、東京文化会館の大ホールがかなり埋まりました。座席数の50%までしか売れないという規定だったのですが、

その内の50%ぐらいは売れましたかね。

石田：《キジムナー時を翔ける》も座席数50%制限でした。それでもかなり入っていたように記憶しています。

郡：そうですね、おかげさまで。2022年2月に予定している《ミスター・シンデレラ》もまだ客席の50%しか入れられないと言われているんです¹。事務局も頑張ったのですが、やはりホールによってどうしても規定があって、新宿文化センターはどうしても半分。東京文化会館や新国立劇場はまた基準が違います。

石田：コロナでいいこともあったけれども、大変なことがずっと続いているわけですね。

郡：そうですね。《キジムナー時を翔ける》も、おかげさまで三菱UFJ信託音楽賞を頂戴しましたけれども、かなりの赤字を出してしまいました。やっぱり座席数50%ということで、それで採算がとれるようにしていたのですが、われわれが望んでいたぜいたくな美術になってしまったということも含めて、《キジムナー時を翔ける》は赤字が大きかった。もうちょっと集客ができればまた違っていたかなと思います。

石田：集客の点で、他にコロナで変わったことというのはありますか。

郡：集客の上ではまず、高齢者がいらして下さらなくなった。これは私が講師を務めている歌のカルチャー講座でもすごく感じています。60代、70代ギリギリぐらいまでは出てきて下さるのですが、それ以上の方というのはやはりみなさん怖がっていて。高齢者のお客さまというのは私たちにとって一番大事だった方たちなのですが、高齢の方が家から出なくなってしまいました。そこがとても残念ですね。

¹ 2021年10月1日の緊急事態宣言解除にともない、会場の許可を得て客席の収容率を100%に変更している。

石田：お客さまの地域的なことで、例えば東京以外の方が来られなくなる、とかそういう変化は感じられていますか。

郡：それはあるでしょうね。土日を利用して、オペラ観劇がてら東京に泊まって帰るという人たちは今はちょっと難しいでしょう。まだ《紅天女》の時は、そういうお客さまが結構いらっしゃったと思うんですが、やはりあれが最後だったという感じなんでしょうかね。

石田：《キジムナー時を翔ける》の公演会場で、沖縄の方に何人会いましたけれども、作曲の中村透さんの関係でわざわざいらっしゃった方たちですか。

郡：そうですね。あとはこちらに在住している沖縄の方がいらしてください。ただ、私も友達が沖縄にいるので声をかけてみましたが、やはりお見えにならなかったですね。中村透さんの奥さまもいらっしゃれなかった。東京でもそうではありますが、特に地方の方がものすごく警戒して、いらっしゃらないですね。あの頃はまだ沖縄もコロナ感染がそれほど持ち込まれていませんでしたが、その後、感染者数が増えてしまいました。

そういう意味では、お客さまが変わってきたということはありますね。大切なお客さまたちだったから、これでコロナが明けてからも戻っていらっしゃるかどうかが、それはすごく心配です。

石田：これであと1年2年経っていくと、当然今のお客さまも年を取っていくわけですから、そうすると高齢で出にくくなるという方もさらに出てきますよね。

郡：ものすごくあります。今もカルチャー講座で私よりちょっと上ぐらいの方でも、絶対、家を一步も出ないみたいな方もいらっしゃるから、やはりもう二度といらっしゃらなくなってしまう。以前は「歌が命だ」なんておっしゃっていた方も、やはり「怖い」とおっしゃっているようで、そういう方が結構

多いです。

石田：合唱の活動がそれで低調になってしまいましたよね。

郡：それはありますね。やはりそういう方たちは一度来なくなると、もう億劫になってしまふ。だから今までのお客さまじゃない方をどうやってつかむかということになってきます。

寄付、配信など

石田：例えばオーケストラはコロナに合わせてファンドレイジングやクラウドファンディングなどやっているところもありますが、日本オペラ協会は何かされましたか。

郡：クラウドファンディングというか、いつも公演の終わった後に総監督の2人、藤原歌劇団の折江忠道さんが大きな募金箱、日本オペラ協会の私が小さな募金箱を持って、事務局全員が立って寄付のお願いをしています。それからコロナ禍ということで日本オペラ振興会として寄付も募りました。毎回、コロナ禍で歌手や団が大変な思いをしていると窮状を書いた手紙を入れて、いろいろとご寄付いただいたり、それから理事や評議員の方たちにもお願いしました。

石田：配信やストーリーミングみたいな活動はされていますか。

郡：今はしていませんが、去年はOPERA de STAY HOMEという、自粛期間中におうちでお楽しみいただくための映像公開をしました。1月の《紅天女》の公演を動画に撮ったものを、5月7日から1週間、全編無料で。視聴数は何万回と結構ありました。他に藤原歌劇団の公演映像も5本ぐらい上げているんですが、《紅天女》の視聴回数だけでも断トツでした。なんといっても『ガラスの仮面』の《紅天女》ですから。

石田：美内すずえ先生はご了解くださったのですか。

郡：ぜひ、喜んでと。

今後について

郡：《紅天女》は再演もしたいと思っています。すぐにでも再演したかったのですが、改訂などもあり、ちょっと先になります。《紅天女》を再演に向けて練り直しながら、これから先もいろいろと企画しているところです。ただ昨今、ホール問題でホールがなかなか取れなくなっています。新宿文化センター、オーチャードホール、東京国際フォーラムといったところが、軒並み改修の時期なんです。オーチャードホールは隣の東急デパート改装からの流れで、何年間かは使えないのではないのでしょうか。

石田：ホール問題がありましたね。

郡：だから2024年に公演予定の三木稔《源氏物語》が、おそらく今のオーチャードホールでやる大きなものの最後だろうということで、ホールがすごく力を貸してくださっています。というのも、東急Bunkamuraの社長が《紅天女》をご覧になって、「これからはオーチャードホールでは日本オペラをやる」とまでおしゃってください。日本人が外国人の役をやるんじゃなくて、日本人が日本人を演じる、母国のための母国語のオペラをと。でも24年以降のことをいろいろ打ち合わせているうちに、オーチャードホールが改修期間に入ることになってしまい、その間の会場としてパーシモンホールをご紹介いただきました。パーシモンホールにお世話になっている間もBunkamuraとはずっとつながりを持っておいて、チケット販売や宣伝もお手伝いをいただいて、オーチャードホールが再開した時にそこにまた戻る予定です。

Bunkamuraは、チケット販売では日本オペラ協会ではできなかった会社関係に売る努力をして下さっていて、あちらもそれが仕事になることでWin-Winになっています。今までのようにBunkamura主催のものだけ売るのではなく、品数を増やしていくべきだと考

えていて、日本オペラ協会も自分のところの1つの商品として扱ってくださっています。

Bunkamuraとは、ここまで来るのに何度も挫折しそうになったけれども、足しげく通うことが大事なのだなどと実感しました。周りは知り合いだらけという私たちの世界と違って、サラリーマンの世界は1回会っただけでは信用されない。何回と会っているうちに信用されるのだなどと、すごく勉強になりました。石田：とはいえ、Bunkamuraはキャパシティが多いだけに大変ですよ？

郡：そうですが、やはりオペラの集客、お客さまをどうやったら増やせるかといったら、ミュージカルに来ているような若い人を引き込むことが大切なんです。今のお客さまはどうしても熟年以上のかた中心なので、若い人を引き込むとなると、やはり渋谷とかがいいんですよ。オーチャードホールの《紅天女》では、若い人に多く来ていただけましたので。これだけの若いお客さまをどうやって捕まえられるかと考えています。

オーチャードホールの代わりに使う、パーシモンホールも東急沿線ですので、東急からすれば自分たちのお客さまが住んでいらっしゃるということで、力を貸してくださっています。東横線と東京メトロの相互乗り入れが始まったことで、渋谷には埼玉方面からも来られるようになったのですが、それで逆に渋谷から新宿や池袋にお客さまが流れてしまっただけでは困るということもあるようです。

石田：なるほど。パーシモンホールはあまり大きくないので逆にやりやすいかもしれないですね。

郡：はい、パーシモンホールで企画しているのは、あまり派手な作品ではないので、ちょうど良かったです。

石田：コロナ禍で、どこの団体も結構大変なようですが、日本オペラ協会はへこたれているという感じではないですね。

郡：全然へこたれてはいないです。私どもは結構元気です（笑）。もちろん、それはコロナについては事務局に任せればきちんとやってくれるというところがあるからです。そういう意味で、安心してこちら側はいろいろとやれています。

石田：分かりました。コロナ禍というのは若干のストッパーにはなったけれども、もう乗り越えたものとして前にどんどん進んでいっちゃうということでしょうか。

郡：そうですね。

石田：本日はありがとうございました。